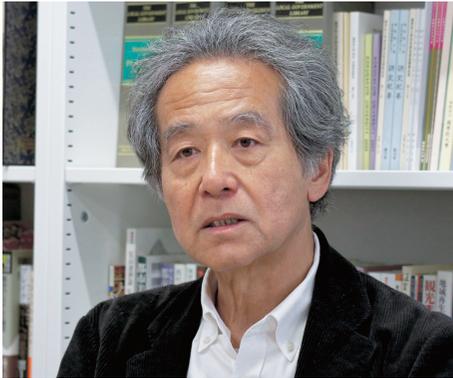


# この人に聞く

にしむら  
西村  
ゆきお  
幸夫氏



**プロフィール** 1952年福岡県生まれ。國學院大學観光まちづくり学部学部長・教授／工学博士。専門は、都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。1977年東京大学都市工学科卒業、1982年同大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年から2018年まで東京大学教授を務める。退官後、神戸芸術工科大学教授を経て、2020年より國學院大學新学部開設に向けて準備を進め、2022年4月開設に伴い初代学部長に就任。現在に至る。また、アジア工科大学助教授(バンコク)、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員などを歴任。『県都物語』(有斐閣)、『西村幸夫風景論ノート』(鹿島出版会)、『都市保全計画』(東大出版会)、『西村幸夫都市論ノート』、『環境保全と景観創造』(鹿島出版会)、『町並みまちづくり物語』(古今書院)など著書・編著書多数。

國學院大學観光まちづくり学部初代学部長となられた西村幸夫氏に、これまで取り組まれた研究テーマについてお話を伺った。(令和5年4月)

## ■学問としての「都市保全計画」とその実践

高度成長期には、フローで次々に新しいものをつくり続けダイナミックに都市を変えることが求められましたが、現在はストックを大事に活用する時代になってきました。私が都市計画を学んだ70年代、高度成長期が終わる頃、自分としてもそれまでの巨大なことを追い求める都市計画では片落ちではないか、開発を進める都市計画の一方で、今あるものの価値に着目して残していく都市計画の考え方があってもよいのではないかと考えるようになりました。これが「都市保全計画」というテーマの起点といえます。

イギリスではリスティッド・ビルディング<sup>1</sup>という制度によって、歴史・文化の観点から価値ある建築物が保護されていますが、注視すべき点はこれが都市計画の制度であることです。つまり都市計画を立てる上で建物の価値を理

解しておくのは当然というわけです。でも、日本だと評価されるのは特別な文化財に限られていました。そこから、価値があるものを単なる点的な建造物だけでなく、都市にあるインフラも含めて考えていくと、都市の価値も広がっていく、そこを手がかりで計画を立てる。開発と保存のバランスを取って、ようやく一人前の都市計画になると考えたのです。私がいた東大の都市工学科では、都市計画の授業はいくつもあるので、多少専門分化して、保全に軸足を置いた都市計画として、1990年から講義を始めました。

ところが、当初は教科書といえるものが何もない。そこで、海外の例を日本に置き換えるところから始めて、学問体系、守るべき対象、「保全」「保存」「保護」といった概念を整理しました。そして、実践のための調査を進め、ちょうどその頃、伝統的建造物群保存地区(伝建地区)ができて、文化財の対象が点から面へと広がってきていたので、それまでの経過とその先の方向性をまとめていきました。それができたのが2004年でした。

そこから、法律、制度もかなり整備されました。まず2004年に景観法ができ、そして2008年に歴史まちづくり法によって、重要文化財を大事にする都市計画が、ハード・ソフトを問わず認められました。ここで文化財としての定義が文化的景観にまで及び、伝建地区よりももっと広がりました。田園風景が日本中に広がる潜在的な文化的景観であるという考え方を受け入れられる時代になってきたのです。2019年には文化財保護法が改正され、文化財保存活用地域計画が定められました。未指定のものを含め地域の中の文化財をすべて洗い出し、そこから歴史・文化をベースにしたマスタープランを立てるという制度です。こうして、文化財の側も活用という視点が加わり、面的な都市計画にまで広がって、都市計画の側も歴史的なところに広がってきたわけです。

私はこれらの制度づくりにほぼすべて関わってきました。またこれと並行して様々な自治体から相談を受け、かなりの数の地域プロジェクトに関わっています。旅館業法改正により分散型の宿も増えてきましたが、福井県坂井市三国町で空き家をリノベーションした宿泊施設のサービスが一举に10件程度近々開始する予定です。今後、建物の改修・再生についてはさらに変わっていくと思います。今までの地道な取り組み、そこに法律や制度が整備され、補助金もついて実際に事業が実施され、民間にもノウハウが蓄積され、人材も育ってくるというふうには裾野が広がってきたのです。できることが徐々に増えてきていますが、地域主体であるべきなので、これからもじっくり進めていく必要があります。

## ■都市における成長の物語を読み解くこと

都市の構造を読み解くためには、都市のこれまでの「成長」「発展」「変化」といったものを一つの流れの中で見ていくことから出発します。明治初期の古い地図、陸軍の陸地測量部の地図、国土地理院の地図のほか、地元にも様々な絵図や古写真があって、それらを比較しながら時代を遊れば遊るほど、だんだんと都市の中心や、昔からの街道筋などととも、その都市がどう成長してきたかが見えてきます。それは、様々な変化をしてきた中で、その時々は何を考え、どういう判断をして、都市づくりを行ってきたのかという、都市の成長物語です。

すると、何か変えようとしたとき、それがこの物語の延長線上にあるかどうか分かるようになります。つまり、物語を読み解いて、大きな都市の流れ、様々な過去の人たちの思いの連なりを理解しておけば、これからの都市のあるべき将来の姿を見通すことができるのです。本に例えると、各章を経て都市が形成されてきて、我々は「現代」の章に存在する書き手であり、登場人物でもあるわけです。でも、ここで完結するわけではなく、次の書き手に引き継がないといけないので、物語が全然違うものになってしまうはいけません。そう考えると、自分たちが今の時代に何をやるべきかという方向感覚も備わってくるのではないのでしょうか。これからも何かを動かすときに、それがこの都市にとってどういう意味があるのかを、物語の中できちんと位置づけることで、みんなが納得できるのです。結局、いかに様々な人から支持を得られるかがすごく大きいのです。そうすれば、その先にあるプロジェクトを応援してくれるようになります。やはり地域の人たちが自分事として取り組むことが大事で、そうしないとなかなか継続していくことは難しいのです。

## ■コロナ禍を経た観光まちづくりにおける新たな視点

近年、地域活性化の有力な手法として、地域資源を活用した観光によるまちづくりが各地で行われてきましたが、コロナ禍で観光需要が激減して大きなダメージを受けました。ただし、この大変な災難の中で何も可能性が見えなかったわけではありません。例えば、教育旅行や修学旅行を近場でやらざるを得なかったけれど、実施してみるとすごくよかったという声が多かった。これまでわざわざ遠くに行き、非常に典型的なところだけ学んでいたけれど、近くにも学ばべき努力をされているところがたくさんあると再認識できたのです。加えて「マイクロツーリズム」という言葉も出てきたこともあり、今一度、地元地域を見つめ直す

ことはできていたと思います。今後、インバウンドを含め観光需要が回復すると、単純にコロナ禍直前までの「オーバーツーリズム」といった観光バブルの再来ととらえるのではなく、足元を見つめ、地域というもののレジリエンスを地道に高めていくことが重要となるでしょう。

特に日本を訪れる海外の方に向けては、単にお金を多く落として帰ってもらうのではなく、地域を深く理解してリスペクトしてもらい、日本人はさすがだねと感じさせるものをきちんと打ち出していく。それがリピーター増加にもつながりますので、こうした方向にシフトしていく契機になることを意識しないといけません。

これは、自分たちの生活のあり方を見直すことにもつながってきます。先日、日本によく来るアメリカ人の友人から、日本人は混んでいる電車で誰か降りようとする、体を動かしてスペースを空けようとするけれども、アメリカ人はそういう感覚はほとんどないと聞きました。そうした状況に置かれることが少ないのもあるでしょう。例えばこうしたちょっとした譲り合いの感覚、日本人にとっては当たり前でも、外から見ると特別に感じられることがあって、こうしたことが地域の価値の向上にもつながってくるように思えるのです。

國學院大學観光まちづくり学部を創設して1年が経ちました。学生たちのまちづくりに対する関心はすごく高まっています。それは、中学校・高校で、総合的学習、地域探究など、みんなで町に出てフィールドワークをして、一つのものをつくり上げるカリキュラムが増えていることが影響していると思います。そこには、小さい頃から教育を通じて地域のことをよく理解し愛着を持ってもらい、将来地元に戻ってきてほしいという願いが感じられます。これは教育の一つの大きな柱になるべきことですよ。

そういう教育の中で自然に身についたことが今の関心につながっていて、ほかの地域に行くときすごく新鮮に感じるといった、率直に好奇心を示す学生が多いです。だから、他者の目があると、まちの魅力がもっとクリアになるので、そういう意味では、観光というテーマがよいきっかけになっていると思います。私の講義で学生にコメントを書かせているんですが、みんなすごく熱心に書いてくれるので、きっと講義内容を面白いと感じてくれているのだと思います。学生数が多いので目を通すのも大変ですが、やりがいと手応えを感じていて、多くの学生が育ってくるとそれが力となりますから、将来多方面で活躍してほしいと思っています。

INTERVIEW

この人に聞く